
BATTLE SCHOOL

紅瞳 愁桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BATTLE SCHOOL

【Nコード】

N4661A

【作者名】

紅瞳 愁桜

【あらすじ】

平凡な毎日を繰り返していたカエデに、ある日大きな異変が起きた。何と学校が、ファンタジーの世界のような「学校」に変わってしまったのだ！さばり魔、ジュンと共に、普通の学校へ戻ろうとするが……？

【序】ミッション

完璧に計画を実行するにはどうすればいいか。

第一に、迷いを捨てることだ。

迷えば、そこで計画が破綻する恐れがある！

第二に、情けは無用だ。

情を見せれば、相手にペースを握られる。

第三に、敵を欺くことだ。

敵を完璧に騙せた地点で俺の勝ちだ！

最後に、常に冷静でいることだ。

冷静であればやられることはない。

息を整え、緊張をゆるめる。

そして、敵がこちらを向いた隙に静かに手を挙げた。

「せ、先生……。吐きそうなんで保健室行っても良いっすか……？」

黙って、教師がうなずいた。

ミッションコンプリートだ！！

【一】名演技

秋松カエデは、隣の席の南尾ジュンが目を閉じ、息を整えているのを偶然発見した。

（…授業中に何やってんだろ？）

カエデの素朴な疑問はすぐに解決した。

現社の斉藤先生が板書を終え、こちらを向いた隙に静かに手を挙げたのだ。

先ほどの表情とは違い、打って変わって苦しそうな表情をジュンは浮かべている。

（サボる気だ！）

そう気づいたときには、時既に遅く、いかにも苦しそうな声でジュンが言った。

「せ、先生……。吐きそうなんで保健室行っても良いっすか……？」

黙って、先生がうなずいた。

ジュンは教科書を机の中にしまつと、ゆっくりと立ち上がった。顔色が真っ青で、今にも倒れそうである。

その変わりように、心から驚いた。

（な、なんて名演技なの！？ 文化祭、男優最優秀賞並だわ！）

呆氣にとられていると、斉藤先生がこちらを向いた。

50代後半なせいか、妙な雰囲気があるこの先生が、カエデはあまりスキではなかった。

目が合うと、正直、目をそらしたくなる……。

自分がそう思われているとはつゆ知らず、その口を先生が開いた。

「おい、秋松。お前、保健委員だろ？ 南尾を保健室まで連れて行ってやれ」

「え！？」

そうだった…。

私は保健委員だったのだ！
すっかり忘れていた…。

……と、なると、私はさぼりの共犯者にさせられるのね……。

チラッとジュンを見ると、斉藤先生に見えないようにウィンクをしてきた。

（はあ… 何で私が…）

心の中でつぶやくが、教師に逆らうほど度胸もないし、現社の授業もスキではないので、素直に従うことにした。

少々シヤクではあるが、ヨロヨロと進むジュンの後をゆっくりと歩きながら、教室を出た。

まさか、これが平凡な日常を壊すきっかけになるとは、カエデもジュンすらも思いはしなかっただろう。

【二】正直者と演技派

「おい、カエデ急げよー」

さっきまでの名演技はどうしたのか、階段のおどり場からジュンが元気に言った。

（この変わり様…将来は役者が詐欺師ね…）

あきれてジュンを見ていると、ジュンが一段飛ばしで階段を上がってきた。

こんな姿を斉藤先生が見たら、即生徒指導室へ連れて行かれるだろう。

そんなカエデの心配を全く理解していない様子で、ジュンが横に並んだ。

横に並んでみると、カエデよりも頭一つ分ほど高いことに気づく。

しかし、折角背が高くとも、その顔には常にイタズラをした後の少年の様な表情が浮かんでいるので、どうしてもアンバランスである。そのギャップが良いって言っている女子もクラスにはいるが…。

ぼーっと考え事していると、ジュンが顔をのぞき込んできた。ビックリして一歩後ずさる。

「なあなあ知ってつか？ この学校には怪談があつてよ…」

「…私、非科学的なモノ信じてないから」

「そんなこと言わずに聞いてくれよー」

捨てられた子犬のような目をジュンがした。
やれやれと思いつつも、少しかわいそうなので、聞いてやることにした。

「でな、でな！ この学校に『異世界へつながる部屋』ってのがあ
るらしいんだ！」

「へー」

「俺、この前も授業抜け出したじゃん？」

「あ、うん」

どうやら昨日のことを言っているようだ。

あの日は大好きな数学だった為、ジュンを保健室に置いてさっさと
教室に戻ったが…。

（それにしても私、昨日も保健委員って言われたのに忘れてたんだ
…）

少々自分が恥ずかしくなりながらも、話したくてウズウズしている
ジュンをうながす。

「そんな時だ！ 何を見つけたと思う？」

「さあ？」

「その部屋だよ！ その実在を俺しか知らないんだぜ！」

何を寝ぼけたことを…と考えると、考えが顔に出てしまったら
しい。

ジュンがムキになった顔をした。

あーあ、正直者ってつらいわ…。

何かを言おうとジュンが口を開いたが、何かを思いついたように目

を輝かした。

「そつだ！ 連れて行ってやるよ！ 俺とカエデの二人の秘密」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4661a/>

BATTLE SCHOOL

2010年10月28日03時18分発行